

## 【福井】「患者さんの暮らしを支えるため」若手医師が学生時から地域で活動する理由-新野保路・今庄診療所医師に聞く◆Vol.1

2023年4月28日（金）配信 m3.com地域版

後期研修を終えてすぐに診療所勤務を始め、地域でも活動する33歳の医師がいる。「今庄診療所」（南越前町）の新野保路氏は、学生時から今庄地区に足を運んで住民と交流し、診療所着任の2020年からはゲストハウスを拠点に医学生や研修医が地域の人と触れ合う企画などを行ってきた。「患者さんの暮らしを支えるため、もっと地域に出よう」。こう考えるようになった背景には、研修時に直面した二つの「驚きの場面」があった。（2023年4月11日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



新野保路氏（本人提供）

——今庄診療所は70年以上の歴史があると聞きます。現在の人的体制と患者数を含め、概要を教えてください。

当院の歴史は古く、開院は1951年にさかのぼります。当時は村立の今庄病院であり、1971年に診療所になって1995年に有床化しました。現在は南越前町の公立診療所として19床のベッドを持ち、外来診療だけでなく在宅医療も行っています。1日の外来患者数は発熱外来を除いて20～50人ほど、在宅患者さんは居宅と施設でそれぞれ20人ほどいます。

スタッフ数は約30人で、内訳は医師が4人（常勤3人）、看護師が16人（常勤13人）、ほかの職種は全員常勤で事務が3人、診療放射線技師、作業療法士、理学療法士、管理栄養士がそれぞれ1人います。病床があるため看護師は比較的多く、外来・病棟・在宅を兼任しています。

作業療法士と理学療法士が訪問リハビリを行っているほか、当院には介護老人保健施設が併設されており、医師とスタッフがそちらで働いていることも特徴です。病棟は柔軟に運用しており、病気だけでなく患者さんの家庭の状況や周囲の医療・介護環境にも配慮し、入院を提案することもあります。



今庄診療所の外観（本人提供）

——介護施設とも密に連携しているんですね。ウェブメディアの記事によると、新野先生は学生時代から今庄診療所と関わりがあったとか。

私は2015年に福井大学医学部を卒業し、後期研修修了後の2020年に今庄診療所に着任しました。診療所に初めて訪れたのは大学2年のころ、地域医療を学ぶサークルの活動の一環でした。大学の授業で出会った先輩医師から今庄診療所の先生を紹介され、夏休みに合宿させてもらえることになったのです。

合宿の実施に当たっては、事前に診療所の先生と打ち合わせてプログラムを作り、外来や訪問診療の見学だけでなく、地域の人とも交流させてもらいました。認定子ども園や消防署に行ったり、土地の文化や名産を知ろうと地域の人に教わりながら定置網漁業やそば打ちを体験させてもらったり。以来、在学中は毎年サークルメンバーとこの地に足を運び、住民に今庄診療所や医療の印象などを取材するフィールドワークも重ねました。こうした活動を通して、海と山が近くて自然が豊富であり、人々が温かい町の魅力を知れました。

——そういった体験があったからこそその診療所着任だったのでしょうか。

そうですね。今庄地区や南越前町が好きになったことのほか、医師として家庭医療や総合診療に携わりたい思いがありました。

私には憧れの先生がいるんです。もう閉院しましたが、幼いころから育った滋賀県大津市に、家族ぐるみでお世話になった診療所がありました。その先生は口数は少ないものの穏やかな雰囲気があり、安心感を抱かせてくれるような人でした。スタッフも感じが良く、私が通りを歩いていると気さくに声をかけてくれました。いわゆる「昔ながらの町医者」への憧れを持って医学部を志しました。

——研修中はさまざまな診療科を回りますが、家庭医になりたい思いは変わらなかったと。

「住民の暮らしに近いところで働きたい」。こんな思いは変わりませんでした。後期研修中は規模の異なる複数の病院でも働きましたが、医療の役割分担として、診療所の方が患者さんの価値観や生活背景を尊重しながら医療を行いやすいのではないかと考えたのです。実際、初期研修中に行われる1カ月間の地域研修時に今庄診療所で働きましたが、こちらでは医療を通して患者さんの暮らしを支えていこうとする雰囲気がありました。

病院で2、3年経験を積んでから診療所に勤務することも考えました。しかし、大学で総合診療に携わる先生から「家庭医として自分のフィールドは早く持っておいた方がいいよ」とアドバイスを受け、「すぐに今庄へ」と決めました。「家庭医療は患者さんとの付き合いや地域との関わりからの継続性が重要。拠点を持ちながらいろんなことにチャレンジすればいい」という先生の考えに共感したんです。

——先生は今庄診療所に着任してからすぐ、町に屋台を出したり、ゲストハウスを拠点に医学生や研修医が地域の人と交流するプロジェクトを始めたりしたとのこと。開業してから地域活動に力を入れる医師はいますが、若い勤務医時代から始めるケースは多くないと思います。

学生のころに出会った先生方の先進的な活動に触発されました。福井市で地域の人とのつながりづくりを進める紅谷浩之先生（詳細は『【福井】「医師でなくスタッフにかかりつけ機能」在宅注力法人の外来展開とは-紅谷浩之・医

療法人社団オレンジ理事長に聞く◆Vol.1』を参照)や、高浜町で健康的な町づくりに取り組んできた井階友貴先生(詳細は『4コマ漫画で学ぶ医学書『赤ふん坊やと学ぶ!』-井階友貴・福井大医学部地域プライマリアケア講座教授に聞く◆Vol.1』を参照)です。紅谷先生が理事長を務める医療法人社団オレンジには2023年4月半ばまで非常勤医として働いています。

先輩方の活動に触れる一方で、研修中に病院で患者さんを診ていても、なかなかその人の生活が見えづらいことにもどかしさを感じていました。救急外来でのトレーニング中には、数十年にわたってかかりつけ医がおらず、体の状態がとて悪くなってから救急搬送されて亡くなる方もいました。泣き崩れるご家族の姿を見て、「もっと早い段階で医療受診していれば……」と悔やまれたあの場面は今でもはっきりと覚えています。

——地域医療に力を注ぐ先輩医師との交流や救急での印象的な場面から、地域にも目を向けるようになったのですね。

学生のころから今庄診療所に足を運んでおり、住民の普段の姿を知っていたことも大きかったと思います。先述の通り今庄診療所で地域研修を行ったとき、私は驚きました。診察室では、住民の様子がまるで違っていたんです。服装や表情、口ぶり……豪快に笑う姿が印象的だったおじさんがしおらしくしており、農作業着姿がかわいかったおばあちゃんが見たことのないぱりっとした服を着ていました。「病院には行きにくいんよ」。そう話す人もいました。

今庄診療所は地域に開かれた医療機関だと思いますが、それでもなお、医療受診にハードルを感じる人が少なくないんだなと。「患者さんの暮らしを支えるため、もっと医療の垣根を低くする必要があるのでは」「医療が地域に溶け込むような状況になれば、患者さんはもっと僕たちに相談しやすくなるかもしれない」。地域活動にも力を入れようと考えた背景です。

#### ◆新野 保路(しんの・やすみち)氏

2015年福井大学医学部卒。後期研修修了後の2020年、今庄診療所に着任。外来・病棟・在宅医療を担いながら、地域活動も推進する。日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

